

# わたくし達の特急列車「うさぎ號」

(口繪参照)

— 具體的生活指導による保育 —

東京女子高等師範學  
校附屬幼稚園 保姆

村上露子

走る！ 走る！ 子供の國の汽車が。

京都、大阪はおろか滿洲までも、澤山のお客様を乗せて走る。その客車が或る時にはバスケットを滿載した食堂車になつたり、或る時には滿洲派遣の兵隊さんを送つたりする。長椅子や積木のプラットホームは、何時もくゞ溢れるばかりの人込み。

やつと一ヶ月を費して、遮斷機が出来、シグナルが出来汽車の箱も連結されて、汽車は殆んど完成された。自分達の作つた汽車だと云ふので、どんなに嬉しいのだらう。得意なんだらう。自分達の手で動かれる。車掌にもなれる。驛夫にも、切符賣にも、物賣にも、踏切番、信號手、そしてお客様になつては、どこへでも好きな所へ行かれる。

先日、倉橋先生がお客様になつてお乗りになつた。皆でわい／＼云ひながら押して行く。先生は大急ぎで煙草をお

吸付けになつて、ポツポツポツと煙りを吐出された。

「やあ！ 汽車の煙が出た／＼」

と皆手をたゞいて喜んだことだ。

「おぢちゃん、倉橋先生のことだつて、乗つかれるのよ」と子供等同士で自慢して居た。

この煙は汽車にはなくてはならぬものではあるが、さて私等が煙草をふかすわけにも行かず、こまつてしまふ。何でも氣のつく一人の男の子が「石炭を焚くと、汽車が火事を起すから、新聞紙をまるめて、燃したらどう？」と云つた。何とかしたいと思つてゐる。

この汽車を作り出してからと云ふものは、子供は勿論、實習科生も私も、汽車と云ふものに就いて、非常に細かい觀察をする様になつた。或る月曜日のこと、

「先生、俣昨日葉山へ行つた時、汽車をよく見て來たの。

ほんとうの汽車はこゝがこうなつてゐる』

と教へてくれたり、

『僕は省線で、シグナル見た。シグナルが下りてゐると、電車が止まつちやつた』

『信號の電氣は赤と橙々と青で、青がついたら、通つてもさゝのね』

『シグナルのこゝの所は黒で、こゝは白さ』

『ライトは豆電氣を使ふといふなあ』

『先生、早く汽車の箱をつないで頂戴』

『早く踏切りが作り度いの』

と、もう子供等は頭の中が汽車で一杯で、居ても立つても居られないと云ふ有様。踏切りを作るために、私は驛まで見に行つた。高さがこの位で、色はこう云ふ様に等と、忘れない様に覚えて来て、一度幼稚園で、子供等に相談をする。『どんな様に踏切りを作りませうね』と尋ねると、『踏切りの高さは僕のこゝ(胸より少し上)位。僕、ちゃんと見て来たんだよ』

『針金が付いてゐて、ピラ／＼動く様に』

『黒と白で、かはり／＼に塗るの』

『持つ所に重りを付けておくと、汽車の通らない時は、ほつておいても、上つてゐて、下りて来ないことよ』

等々。子供の觀察の鋭いのは、今更ながら驚いた。

『この汽車の名は何とつけませう』と意見を聞くと、

『超特急のツバメ號』『富士號』『櫻號』

と云ふのが多く、我が子供列車に相應しい名を、なかなか云ひ出してはくれない。その中に、一人の女の子が『リス號がいゝわ』と云ひ出した。成程と思つて居ると、皆の子供が口々に『リスより兎の方が早いよ』

『先生、ウサギゴウ！ ウサギゴウ！ 超特急だよ』

と、そこで、満場一致でウサギゴウに賛成した。

梅雨晴れの一日を、心ゆくまで、汽車を中心に、外で遊びを發展させる様と、前日より色々準備をして置く。先づ切符作り。二等は水色、三等は桃色の紙で、ウサギゴウは二三等特急なので、行先きをそれ／＼好きな様に子供に書かせた。『大阪』とか『京都』とか『神戸』『下關』と云ふのが大部分で、中には『大垣』と云ふのや『奈良』と書いたのもあつた。一人の男の子がそれを見て『奈良へはこの汽車は行かないんだよ。途中で乗りかへなくちゃだめね』

と云ふ。急行券、寢臺券までも澤山に出来上つた。

其の他粘土で土瓶とお茶碗が數個出来た。切符賣場の窓口やら、物賣りの箱を、緑に塗つたりする。實習科の方に布で信號の赤白の旗と、賣り屋さんの箱の紐を作つて來てもらふ事にお願ひした。

さあ、昨日からのお約束で、朝來る子供も、眼を輝かせながらお部屋に入つて來るなり、早速に、箱に用意して置いた色紙でお金を入れる財布を作る者、又銀行屋さんになつて、打抜きでボール紙を打抜いてお金を製造する者、それに字の書ける子供が、一セン、五セン、十セン、と記入して皆に分配して居る。

女の子の數人は、甲斐々々しく驛辨當のお海苔巻きを巻くのに、如何にも忙しさう。一人の男の子は茶ボール紙で干瓢を一生懸命に切つてゐる。そうかと思ふと、お外から新らしいお菜を採つて來る子供もある。海苔は黒い模造紙御飯は畫用紙、それに干瓢やお菜を入れて、見るからにおいしさうなお海苔巻が出来上つて行く。其の外、木の葉や草で、色々なお菓子も出来た。

仕度はよしと、汽車はお部屋の車庫から外へと運ばれ

た。切符を買つた人は、改札係の改札を受けて、衝立を境に、積木のプラットホームに出る。其の間を、箱を首から黄色の紐でぶら下げて『辨當々々。サンドイツチ』『お茶くく』『お菓子はいりませんか』と呼び歩く賣り屋さんの聲に『僕に一つおくれ』『ちよつとく、わたしにお海苔卷下さいな』と財布から嬉し相にお金を出しては大騒ぎ。一番お海苔巻きがよく賣れた。

車掌が『ビリくく』とならせば、すかさず『ポーツ』と汽笛をならして汽車は發車する。車掌さんは馴れたもので動き出してから悠々と乗る。汽車の後押し人夫は、大汗だくく。(土の上では廊下等とは違ひ摩擦が大になるので、なか／＼力が入る。先生か實生科生の一人が、必ず附いて歩く事にしてゐる。)しかも愉快さうに押して行く。信號手の支配するシグナルの信號は必ずよく守る。初め不注意にシグナルが下つてゐるのに通過して信號手にどなられた。踏切番はなか／＼仕事に忠實だ。他所の大きい組の豪傑連も、この汽車には遠慮して、わづかに踏切番にさせてもらつて、うれしさうにそれに甘んじて居るのを見ると、氣の毒になつて來た。それで『一度ほかの組の方をお客様にお

呼びませうね』とやつと承諾を得た。小さい組の子供はよく乗せてもらつてゐる。何しろ見物人で大變だが、遮斷機が出来て以來、一度も事故を起した事がない。踏切を通るのが皆にとつて、何よりも嬉しいらしい。『交通信號には必ず従ふ』と云ふ精神が、自然の中に、この遊びに依つて養はれて來た事は、悦ばしい事だと思ふ。

子供の生活の中心は今はこの汽車にある。お畫描きをし、貼り繪をし、大部分が汽車を占める。今までは汽車は大體男の子が好んで描いてゐたものだった。處が、もうこの頃では、誰れ彼の區別がない。そして、忘れずにシグナルと、踏切とをつける。思へば、空箱利用の汽車もこゝまで發展して來た。

構造に就いて。そも／＼この汽車は、實習科生に相談して、機關車にする樽を方々探してもらつて、やつと手頃な釘の樽を、わざ／＼新宿から買つて來てもらつた事に初まる。子供等ははこの樽を見てどんなに喜んだ事か。子供等の頭の中には其の瞬間あの偉大な汽車の姿が作られた事であらう。自分等の乗られる汽車を作り度いとこの要求に、勇み

立つた。とにかく、機關車が空樽なら、客車も空箱を利用して作つたなら、きつと面白く、又手軽に出來ると思つて計畫を立てた。

機關車。釘樽（これは大きな釘屋か金物屋に行けば分けてくれる）煙突とお釜は、海苔の空罐の身と蓋とを使ひ、縁を二種位缺で切れ目を入れて、樽に釘で打ち付けた。ライトはあれやこれやと考へた末、燒鹽びんの蓋を取つて、其のまゝ工夫して釘で止めた。

石炭を燃す所。大きな密柑箱の片側の板を剝して、上部を其の板で塞ぎ、其れを立てゝ庇を付けた。男の子が、ロボットの機關手を作り度いと云ふので、皆協同して粘土で作つた。上に日本紙をちぎつて貼り付け、其の上から繪具を塗る。帽子が黒、上衣が黄色、ズボンが水色、ロボットの乗る臺も作つた。然し汽車の出來上つた今となつては、子供等自身が機關手になりたく、石炭車に乗り込んで、機關手になり澄まして居る。そしてロボットの臺はお客様の靴の臺になつて、丁度石炭靴は黒いから）の代りになつていゝんだとの事。

子供等は、大工仕事は殆んど初めてで、如何にも面白い

らしく、よく手傳つてくれる。力が入る仕事なので、一寸位の釘を、せい／＼一人が三本程打てば疲れて代る。初めの中は、なか／＼力が足りないし、眞直に打てなかつたのに、随分此の頃では上手になつて來た。

お部屋が狭い關係上、いつも外へ莫塵を敷いて、其の上で仕事を續けて居た。この方が、お隣の組の御迷惑にもならず、朝からカン／＼やつても音が響かないので安心して出来る。蜜柑箱の板を剝がす事、釘を抜く事の上手な子供が居て、よくしてくれた。

石炭車。これも機關手臺と同じ様に、蜜柑箱を工夫する。客車。サイダーの大きな突箱を二つ求めて來た。子供等は其の箱を見て、早速に自分の椅子を乗せて乗つて居る。子供の椅子では大きすぎ、高すぎて、一人しか垂れないので、大急ぎで腰掛けを作る事にした。丈夫な板に脚を付け脚を箱に打ち付けて、具へ付けの二人乗り椅子が出來上つた。大人が乗つても毀れない。

木を切る事と、釘を打ち付ける事を子供に手傳つてもらふ。こゝでは可成り太い長い釘を使つたので、一本がやつと。

車。車は箱の寸法を測つて誂へた。丈夫で價の安いものをと考へて、鐵の車にした。この車をしつかりと打ち付ける爲に、機關車にも、客車にも、底に板を渡し、廻りに更に厚い角棒を打ち付け、處々に、横にも棒を渡してしつかりさせた。鑿を使つて、車の心棒を木にはめ込む様にして止める。これは子供ではあぶないので、私共でする。もう車が付くと、嬉しくて／＼廊下や、お遊戯室を押し歩いて歩く。ところがゴムが付いて居ない故、快速力を出すと、ガラガラ、キイ／＼と騒しい音がして、こまつた。油をさして幾分よくなつた様であるけれど、お天氣の日は外へ持出して遊ぶに限る。外では廣々として障害物の無い代り、少々滑りが悪くて骨が折れる。箱はもうこれ以上連ぐと、子供の力では手に合はなくなる。初めは汽車が珍らしくて、箱の側にくつついてぞろ／＼歩いた爲、車の心棒の先きで、怪我をした人があつて心配した。それで早速、交通巡查を置いたり、シグナル、踏切の必要にせまられた。

連結機。これも、丈夫で取りはずしが出来るものをと、釘屋に相談して、一方が鍵になり、一方が輪になつて振込んで止める様なのを作つてもらつた。

シグナル。巾十糎、長さ四十糎の板と、ボール紙で信號燈の形を二枚切り丸を二つ切りぬい、て裏から赤と青との模造紙を貼り付けた。二枚のボール紙で板の先きを銕み、糸で膝つて板に小釘で打ち付けて止める。

シグナルは、普段は下つてゐて、紐を引つばると、上る様に工夫して取り付ける。この長い、頭の重い棒をどうして立たせるかには、少なからず考へさせられた。とうとう口繪の寫眞の様な丈夫なのが出來上つた。この時ばかりは何とも云ひ様のない程嬉しかつた。

遅斷機。シグナルと同様の要領で、上つたり、下つたりする。針金のピラ／＼は太くて、私等の手にはおへなくて針金を買った店で、長さ三十五糎宛十六本切つてもらつて來た。それを下の木と一緒にピラ／＼動く様にするので、上下の棒に小さい輪釘を打つて、針金の兩端を折り曲げ、その輪に通して止める。これはシグナルとは反對に、普段は上つて居て、汽車の通過の時に下る様にするのがほんとうであるので、本物の様に、持つ所に重りを付け様と思つたが、並大抵の重さではだめな事が解つた。萬一そんなものでも倒れて、子供の足にでもあたつたら大變。そこで戸

の鍵の様なもので、上つてゐる時はそれで止めて置かうと思つてゐる。脚の付け方はシグナルと同様。

塗り方。塗料のいゝのが見付からなくて、これには一番こまつた。限りある材料費のこと故、お値段が高いものはこまる。色がよくても、外へ持ち出すから水氣に弱いものは更にこまる。あれやこれやと、塗料屋を探して歩いたがやつぱり安くて、これはと思ふのがない。仕方なく、有合せの塗料(セルベツト・ラツカー)を使ひ、足りない分はエナメルを使ふ事にした。

汽車。機關車の樽は黒く塗る。煙突は罐の地色(茶色)そのまゝ。ライトは黒くして縁だけ細く黄色にする。その黄色が非常に功を奏して、全體が引立つて見える。列車番號は、赤地に縁を黄色にして、數字は白を使ふ。

機關手臺と、石炭車とは黄色のラツカーを。

客車は、あまりにか／＼と光らない様にと、地に胡粉を膠でといいたのを塗つて見た。其の上から外側は、一つは赤(三等車)一つは青(二等車)のラツカーを塗る。内側は水に濡れる心配もないので、海の組の人形のお家にお塗りになつたのと同じマンローのクリーム色を塗つた。ところ

が溶方が薄かつたせい、色がはげる。そこで、ニスを上から引いて見た。

シグナルの、上つたり下りたりする板は表は赤くして、白い條を入れ、裏は白くして、黒い條を入れた。其の他は白と黒とのエナメルを塗る。

遮断機も黑白互ひ違ひに塗つて、すつかり踏切の感じが出て来た。

子供等は塗る事は大好きで『僕に塗らして』『私にも』

倉橋主幹、今夏の講演日程は左の通り、地方會員諸姉のためにお知らせ致します。

七月

十一日 堺市保育會講演會

十二日—十四日 大阪市南區保育會講習會

十六日—十七日 愛媛縣保育會講習會(松山市)

十八日—十九日 愛媛縣主催講演會(今治市、八幡濱町)

二十日 京都本願寺講習會

二十二日—二十七日 文部省講習會

二十八日—三十日 帝國教育會講習會

と大變である。洋服をよごされるとこまるので、悪いエプロンを掛けさせて、手傳つてもらふ。『この踏切ペンキ塗り立て』等と書いて、子供等が勝手に立札を立て、居るのを見ると、思はず頬笑まれる。之れからまだ、驛を作つたり、切符賣場や改札口やプラットホームを工事して、もつと遊びを發展させる様、計畫を立て、居る。

二十八日

佛教保育講習會

三十日

昭和保姆養成所保育講習會

八月

二日—四日 長崎縣北松浦郡教育講習會(平戸町)

五日—七日 長崎縣保育會講習會(長崎市)

未定

二十六日—二十八日 靜岡縣教育會講習會(靜岡市)

二十九日—三十一日 靜岡縣富士郡教育會講習會